奨励賞

社長の太鼓判

松田　哲夫

生まれながらの障害の身に
世間の目が矢のように刺さる
のを知るようになった
それを意識すると
自然と身構えるようになる
鉄板のような固い鎧で
心を閉ざすようになった
人との会話もなくなり
暗い日々が続いた
母は心配して
私がいるじゃないか
もっと心を大きくもって
自分を信じて強く生きよと
云ってくれた

いろいろ苦労したが
洋服を仕立てる店を
持つことができた
最初の内は頼んで
作らせてもらったが
二回目から頼んでも
注文してくれる者が
いなくなった
どうしてだろう
心は深く沈んだ
母は大きな声で型が古いからや
これからは
今はやりのものを取り入れんと
だめなんだと云った
あっそうかとやっと気づいた
母は続けて云った
勉強の仕直しや
大阪へ行って勉強して来いと
云った
母は大阪へ一緒に来てくれた
弟子入りできたのは
杉山裁断洋服研究所といふ
裁縫を教える店だった
入社できたが
社員からは白い目で見られた
社長が出来た人で
ここで働いて新しい技術を
身につけて行けと
今はやりの型紙をいくつも

教えてくれた
風呂に入るときには
社長が背中を向けて
負んぶして湯壺に
一緒に入り洗ってくれた

親にも優る心のやさしさに
涙が出て止まらなかった
この人のためにも
泣いてはいられない
笑って生きようと心に決めた
必死に学んだおかげで
社長の太鼓判をもらって
帰ることができた
母は陰でこっそり泣いていた

世間では親の恩は山より高く
海より深いと云うが
わが母はそれよりも
もっと高く深くて
宇宙の果てよりも奥深いと
感謝して暮らしている